

# わたしの聖戦

◎◎女性が働くことについて◎◎◎ 31

医学博士・医学ジャーナリスト 植田美津江

## 女性が描く「官能小説」

世に「官能小説」と呼ばれる分野がある。

官能とは、辞書には「耳・鼻・目など感覚器官の働き」とか「感覚器官を通して得られる快き。特に性的な感覚」といった意味が示されている。つまり、読むと性的なエモーションにつながる小説ということになるだろうか。

今注目の官能小説といえば、現在日経新聞に掲載中の渡辺淳一氏によるものがある。数年前に大ブームを起し、映画化もされた「失楽園」と同じ流れを汲（く）む内容で、人生の華の時期を過ぎつつある中年男性と年下の人妻との不倫の過程が中心となっている。

これを官能小説と呼ぶ所以（ゆえん）は、内容のほとんどがベッドで繰り広げられる赤裸々なシーンで占められるからだ。これが、中高年男性に大好評。夜の飲み屋ではときその話で持ちきりだと聞く。

人生の終盤にさしかかった主人公男性に共感するのか、美しい人妻との不倫願望があるのか、あるいは官能場面に興奮するのかかわからないが、私自身「渡辺淳一は素晴らしい」と絶賛する男性の声を数人から聞いた。しかし、この小説、女性の評判はそれほどでもないところがある。人妻は3人の子を持つ

30代の「清楚（そ）な細身の美人」なのだ、この設定がすでにウソクサイのだ。いまだこんな人妻っている？ というのが偽らざる感想である。実際このような女性が存在するとしても、せりふや行動、どれをとっても

彼女たちの描く官能場面や登場人物（特に女性）の描き方は本当に生々しく容赦がない。

行為そのものを具体的に描くというよりも、ベッドの中のちよっとしたしぐさや声、ひそやかに交わされる会話すべてに

### 官能のオーラが漂い。



どうも世の男性が永遠にあこがれる女性像としてしか描かれていないように、空々しく白けた気になってしまふ。近頃は、女性たちも官能小説を積極的に書きまくっている。文章の技巧や洗練さはともかく、彼

凝縮させた存在として、真正面から読み手に迫ってくる。一昔前、作家の瀬戸内晴美（瀬戸内寂聴）が、作品のなかで「子宮」という用語を用いたために世間の騒ぎ（ひんしゆく）を買ったといわれるが、

そんな時代はとうに大昔のことだ。男性作家によるものがほとんどであった官能小説から、つくりものではない、自分たち女性が主人公の官能小説が読めるようになったというのは素晴らしいことではないだろうか。すべてにおいて女性の才能が男性のそれより勝るとみなされる時代であるが、官能小説も例外ではない昨今と映る。

とはいっても、官能小説の分野を確立したのは過去の男性作家達の偉業でもある。人気のホラー映画監督に「一番怖いのは女性です」と言わしめた女性を描く作業は本来困難な仕事のはず。色々な視点で描かれた官能の世界を堪能するとともに、その難事業に果敢に挑戦し続けてきた男性作家達に、謹んで敬意を表したいものだと思う。

イラスト・三浦義雄